川崎市青少年科学館紀要, (35) : 25-27, Mar. 2025

報　告

川崎市におけるシンジュキノカワガ *Eligma narcissus* (Cramer,1775) の記録

三田村瞬*・横田 光邦*

Records of *Eligma narcissus* (Cramer,1775) in Kawasaki City

Shun Mitamura* and Mitsukuni Yokota*

はじめに

シンジュキノカワガ *Eligma narcissus* (Cramer, 1775) は北海道・本州・四国・九州・対馬に分布記録がある (岸田, 2011)。中国大陸原産のコブガ科 Nolidae の蛾として、ほぼ毎年飛来し、二次発生する偶産蛾であった (駒井ほか, 2011)。しかし 2023 年から各地で発見例が増え、兵庫県内では大発生が報告された (髙橋, 2024)。2024 年には埼玉県内の 3 地点でも記録されている (矢口ほか, 2024)。

神奈川県内では横浜市青葉区で成虫の死骸が記録され (岸・八木, 2006)、川崎市内でも麻生区黒川で蛹殻が記録されているが (中臣ほか, 2005)、連続した記録はなかったことから単年の偶産であった可能性が高い。

川崎市内では、2023 年、2024 年と連続して記録され、多数の幼虫も記録できたので報告する。

記録

[多摩区]1ex (成虫), 多摩区東生田, 9-XII-2023, 三田村瞬確認; 6exs (終齢幼虫), 多摩区枡形, 21-IX-2024, 三田村瞬確認; 多数 (各齢幼虫), 多摩区枡形, 13-X-2024, 横田光邦確認; 1ex (終齢幼虫), 多摩区枡形, 3-XI-2024, 三田村瞬・横田光邦確認; 多数 (各齢幼虫), 多摩区東生田, 6-XI-2024, 三田村瞬確認

筆者一人の三田村は 2023 年 12 月 9 日 18 時、おし沼広場入り口にあるコナラ *Quercus serrata* Murray (1784) の樹皮上で口吻を伸ばし、樹液を摂食している本種の成虫を確認した (図 1)。この日の最高気温は 19 ºC、最低気温は 8 ºC と 12 月にしては比較的暖かい 1 日であったので、活動が活発になったと考えられる。

2024 年 9 月 21 日 19 時、菖蒲園内に生えている本種の食餌植物であるニワウルシ (シンジュ) *Ailanthus altissima* (Mill.) Swingle (1916) の、1.5 m ほどの実生の葉で終齢幼虫 6 頭を確認した (図 2)。その脇に生えている 2.5 m ほどのニワウルシは、すでに食べつくされ葉が全て無くなっていた事から、相当数の幼虫が発生していたと推測される。

また、筆者の一人の横田が、10 月 13 日に七草峠の斜面に生えているニワウルシで、本種の終齢幼虫を含む各齢数の多数の幼虫を確認した (図 3)。

図 1. シンジュキノカワガ成虫

図 2. シンジュキノカワガ終齢幼虫

図 3. シンジュキノカワガ終齢幼虫

*特定非営利活動法人　かわさき自然調査団
Kawasaki Organization for Nature Research and Conservation

11 月 3 日には日本民家園内で徘徊している終齢幼虫を筆者らが確認した (図 4)。民家園内にも食樹のニワウルシが生えており、幼虫によって食い尽くされ、葉が全て無くなっていた (図 5)。

11 月 6 日にも東生田バス停付近にある生田緑地のフェンス内から生えているニワウルシに幼虫が発生していた (図 6)。幼虫の成長具合はばらついており、数も非常に多かった。

図 4. シンジュキノカワガ終齢幼虫

図 5. 葉が食い尽くされたニワウルシ

図 6. シンジュキノカワガ幼虫

おわりに

これまで偶産蛾として各地で時折発見され、報告されてきたシンジュキノカワガであるが、越冬出来る条件さえ整えば、通年の発生が続き、定着してしまうのも容易であると考える。高橋 (2024) の記録によれば、成虫が冬季の 12 月から翌春の 3 月まで見られていることから、兵庫県あたりでは成虫で越冬できているようである。

継続発生として考えられることの第一に、温暖化により冬季の気温が上昇することで、成虫が越冬できるようになるのではないか。前述したように、冬季も気温が高い日は活動が見られたことから、冬眠するのではなく樹液などを摂食しながら生き延びられるかもしれない。また、ヒートアイランド現象により、都市部の気温が上昇していることも川崎市周辺で越冬できる要素となっているかもしれない。

第二に本種の食餌植物であるニワウルシは成長が速く、また種子の飛散以外に地下茎からも増えるため (林, 2017)、公園や森林だけでなく、市内の幹線道路脇などでも多く見られるようになったことが、数を増した要因の一つと考える。なお、同じニガキ科 Simaroubaceae のニガキ *Picrasma quassioides* (D.Don) Benn. (1844) が生田緑地のおし沼広場に数本植樹されているが、そちらでは幼虫の発生が見られていないことから、食餌植物としては利用されていないと考えられる。

引用文献

岸一弘・八木正, 2006. 横浜市青葉区でシンジュキノカワガを採集. p. 60, In: 神奈川虫報 第 155 号, 60 pp., 神奈川昆虫談話会, 小田原.

岸田泰則(編), 2011. 日本産蛾類標準図鑑 Ⅱ. 416 pp., 学研教育出版, 東京.

駒井古実・吉安裕・那須義次・斉藤寿久(編), 2011. 日本の鱗翅類 系統と多様性. 1306 pp., 東海大学出版会, 神奈川.

中臣謙太郎・佐野悦子・成田和子・野澤興一・横田光邦・菅原彰宏, 2005. 生田緑地など川崎市産蛾類目録 (2004) -生物の相互作用の解析に向けて-. 川崎市青少年科学館紀要, 16 : 27-38.

髙橋弘樹, 2024. 兵庫県とその周辺で得られたシンジュキノカワガの記録と知見－2023 年の大発生, 周年経過, 成虫の行動など－. pp. 5-19, In: きべりはむし 47 巻 第 1 号, 74 pp., NPO 法人こどもとむしの会, 兵庫県.

林将之, 2017.　葉っぱで調べる身近な樹木図鑑. 208 pp., 主婦の友社, 東京.
矢口芽生・斉藤創・串田宏人・白鳥勝也, 2024. 埼玉県におけるシンジュキノカワガ(幼虫)の記録. p. 37, *In*: 月刊むし 646 号, 64 pp., むし社, 東京.